

京極読書新聞 <第7号>

発行日 平成21年10月1日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

啄木文学散歩② (札幌～小樽) かなしきは…

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

明治40年8月の函館大火によって職場を失った石川啄木。新しい仕事、家族がいっしょに暮らせる家を求めて旅立った場所は札幌でした。

しんとして幅広き街の

秋の夜の

玉蜀黍(たうもろこし)の焼くるにほひよ

(札幌・大通公園歌碑)

ちなみに、この時の啄木は札幌の街を知りません。初めての街でした。(啄木が知っている北海道は過去の船旅による函館と小樽だけなのでした。)

前回ご紹介した「真夜中の倶知安駅…」もそうですが、啄木の歌に「石狩」や「空知川」といった北海道内陸部の地名が登場し始めるのには理由があります。それは明治37年の北海道縦貫鉄道の開通です。最後まで難所として残っていた倶知安～小樽間(稲穂峠)のトンネル工事がこの年完了し、人々が、船に頼らずに函館から釧路までを移動することが可能になったのです。

現在の私たちが当然のように認識している「北の大地＝北海道」といった北海道イメージは、じつは、この明治37年を境にして始まったイメージといえます。それまでは船旅が主流ですから、北海道イメージは「(横浜)～函館～小樽～稚内～大泊(樺太)」といった、港をつないだ「島」状のイメージが「北海道」だったのです。

啄木の歌集「一握の砂」は、この点でも、当時としては画期的な作品でした。「北の大地」、「大陸」状の北海道を初めて日本

文学に登場させた記念碑的作品でもあるのです。

かなしきは小樽の町よ

歌ふことなき人人の

声の荒さよ

(小樽・水天宮歌碑)

啄木の札幌滞在は二週間という驚くべき早さで終わりを迎えます。九月末、啄木が向かったのは小樽でした。札幌の「北門(ほくもん)新報」という新聞社から、小樽の「小樽日報」へと仕事を乗り換えたのです。

かなしきは小樽…
とうたった啄木。現代人の感覚では、どうしても「かなしきは」の部分に目をひかれ、「悲しい小樽人」をうたった歌と解釈されがちですが、いや、そうではないという説

もあります。この歌の力点は「歌ふことなき」にこそあり、当時、日露戦争勝利によって南樺太を得、小樽からの定期航路も開かれ、景気の良さに沸きに沸いていた小樽の街の活気を「歌ふことなき」という比喻でうたったのだという説です。ひ弱な文芸や技芸にひたることなく、まるで突貫するかのように日々を働く小樽人のバイタリティに驚嘆した歌である、と。さて、あなたはどうか感じますか？

10月17日の「後志・啄木をめぐるバスの旅」でも、こんなお話をしたいですね。

10月17日(土)には、倶知安～余市～小樽の石川啄木ゆかりの地を巡る『後志・啄木を巡るバスの旅』を予定しています。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

「木の実が出てくる本」

湧学館 佐々木 和恵 (ささき・かずえ)

山や丘が色づきはじめ、田んぼや畑では収穫を迎え、季節はすっかり秋です。どんぐりや松ぼっくりなど、森も実りの季節。今回は「木の実が出てくる本」を紹介します。



最初の本は「木の実とともだち」。動物たちが木の実をさがしに森に出かけます。赤い実、黒い実、どんぐり、毒になるものなどをスケッチで紹介。木の実を使ったジャムや寒天の作り方もついていますよ。カラフルでかわいい絵が素敵な、大人が読んで楽しい絵本です。

次は「しらぎくさんのどんぐりパン」。新しい町に引っ越してきたばかりの姉弟、さわことせいや。しらぎくさん、という不思議なおばあさんの家に迷い込み、それぞれ素敵なプレゼントをもらいます。そのプレゼントが、二人に教えてくれる大切なこととは？

次は「机のなかの竜の森」。ふしぎなおじいさんから、竜の卵だ、といってどんぐりと、竜栽培セットをもらったコータ。木でできた古い勉強机のなかで竜を栽培することになりますが…。竜の森を見守るコータの心の変化に注目！

最後は、「森の工作図鑑どんぐり・まつぼっくり」と「木の実の恐竜たち」。森で簡単に手に入る材料で作れる、かわいいオブジェがいっぱい！私もいくつか作ってみましたよ。「木の実が出てくる本」は他にもたくさんあります。読書の秋の一冊に是非どうぞ。



職場体験を終えて

京極中学校 3年 藤田 翔 (ふじた・しょう)



僕は湧学館で職業体験をしました。ここではみんなにたくさんの本を読んでもらうためにとても細かな工夫がされていました。それは書架の整理です。本が手に取りやすいように前方に並べてあるなんて僕は知りませんでした。僕も書架の整理を体験しましたが、とても簡単なことではありませんでした。また僕は本の修理を体験しました。手が不器用なのでなかなかうまくはできませんでしたが回数をこなすとうまくできるようになりました。

普段行っていた湧学館とはまた別世界の湧学館を知ることができました。とてもわかりやすく指導してもらった湧学館の司書の方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

さらに中学校に持っていく出前図書の本の選定もしたので是非読んでもらいたと思います。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

